

宝石鉾脈の  $\Omega$  採掘師は  
竜族監督  $\alpha$  に匂いで暴  
かれ坑道の奥でカント  
を犯され番の刻印を刻  
まれる

「……ここだ」

岩盤の奥に走る薄い光の筋。宝石の鉱脈だ。リオはゴーグルの位置を直し、横穴にピックルを突き入れた。

ガギン、と硬い感触が手首を打つ。砕けた岩の断面に青い結晶が覗いた。蒼玉の原石。

「当たりだ」

呟いて、口の端を上げた。三年目の中堅採掘師。βのフリも板についた。同僚からは「当たりリオ」と呼ばれて重宝がられている。まさか自分の汗に含まれる精霊結晶が鉱脈を活性化させているとは、本人も知らない。

ここは映画のロケ地みたいなものだ——リオは割り切っていた。異世界に転生して、カントボーイの身体を押しつけられて、抑制剤で発情を抑えて、男のフリで生きている。前世では低予算映画のカルト監督。今世では鉱山の末端労働者。どちらにしても地下に潜って何かを掘り当てる人生だ。

坑道の奥から足音が聞こえた。規則正しい。重い。

振り返らずにピックルを振るい続けた。足音の主は分かっている。ここ数日、毎朝のように「巡回」に来る男。

「……また来たのか」

「鉱脈の状態を確認しに来ている」

低い声が岩壁に反響する。第七鉱脈監督官、ヴァルド。銀灰色の短髪に、こめかみから伸びる黒曜石の角。首と腕にま

だら模様の暗い鱗。金色の瞳。身長196センチの竜族が、狭い坑道の天井に角をこすりそうな体勢で立っている。

リオはヴァルドの視線を背中に感じた。正確に言えば、視線というよりも——嗅がれている。

「毎日来なくても、採掘報告は書類で上げてる」

「書類では分からないこともある」

声は低く、感情を読ませない。しかしリオは気づいていた。この竜族の監督官が自分を見るとき、金色の瞳がわずかに揺らぐことに。鼻孔がかすかに動くことに。

——数日前の落盤事故以来だ。小規模な崩落で退路を塞がれたリオを、監督官自らが救助に来た。岩を素手で除去する半竜の腕力に呆気にとられていると、引きずり出された拍子にヴァルドの腕がリオの腰を掴んだ。至近距離。竜族の高い体温が腰骨を灼いた。

あの時、ヴァルドの手がなかなか離れなかった。

「……用が済んだなら、邪魔だから出てくれ。狭い」

「お前、いつもこんなに汗をかくのか」

振り向くと、ヴァルドがリオの二歩後ろに立っていた。狭い坑道で、すれ違うのも困難な距離。松明の炎がヴァルドの鱗に反射して、暗い光沢を走らせる。

「坑道は暑いんだ、ここ」

「他の人間はそうでもない」

ヴァルドの視線がリオの首筋に固定された。リオは本能的に後退った。背中が冷たい岩壁に当たる。

ぼたり。

天井から水滴が落ちる音。静まりかえった坑道の中で、二人の呼吸だけが近い。

ヴァルドの喉の奥から、かすかな唸りが漏れた。低く、地鳴りのような振動。岩壁がそれを拾って増幅する。

リオの心臓が跳ねた。恐怖じゃない。名前をつけたくない何か、胸の底でざわついている。

「——なんでもない。作業に戻れ」

ヴァルドが踵を返す。広い背中が松明の明かりに照らされ、暗い坑道に消えていく。

リオは岩壁に背をつけたまま、自分の心臓がうるさいことに舌打ちした。



三日後。

「C-12の深層に未踏査区域がある。鉱脈品質の調査に同行しろ」

ヴァルドの命令に逆らえる立場ではない。リオはゴーグルをつけ直してピッケルを担いだ。二人きり。松明一本の明かりを頼りに、通常より深い坑道を進む。

狭い。

リオが前を歩き、ヴァルドが後ろを歩く。坑道の幅は一人一人がやっとで、ヴァルドの体格では肩が壁を擦る。背中にヴァルドの吐息がかかるほど近い。

——暑い。

正確には、後ろから灼くような熱気が押し寄せてくる。竜族の体温だ。人間より遥かに高い。狭い空間にヴァルドの熱が充満して、リオの汗が止まらなくなる。

(……まずい)

汗をかくと、匂いが出る。リオ自身は感知できない精霊結晶の匂い。だがヴァルドは——竜族は、嗅覚が人間の数百倍だ。

「ここだ。この壁面を調べろ」

行き止まりの空間。奥行き三メートルほどの小さな洞で、天井が低く、立ち上がれない。リオはしゃがんで岩壁に手を当てた。

そのとき、背後からヴァルドの手が腰に回った。

「——動くな」

「は？ 何して——」

「お前の匂いを確認する」

ヴァルドの顔がリオのうなじに押しつけられた。深く吸い込む音が、岩壁に反響する。全身に鳥肌が走った。

灼熱の吐息がうなじを這う。竜族の高い体温が、背中越しにリオの身体を包む。前は冷たい岩壁、後ろは灼ける竜族の身体——その温度差に、リオの乳首がツンと立った。

(やめろ……反応するな……)

自分の身体に言い聞かせる。だが身体は言うことを聞かない。カントボーイの身体は、 $\alpha$ の匂いに——本能で反応する。

「この匂い……お前、 $\beta$ じゃないな」

全身が強張った。

だがヴァルドはそれ以上追及しなかった。代わりに——

「——お前のここから、宝石の匂いがする」

ヴァルドの指が、リオの作業着の襟元から滑り込んだ。鎖骨のくぼみを辿る。指先は乾いていて、体温だけが異常に高い。触れた場所が焼き印みたいに熱を残す。

「っ……」

声を殺した。坑道は静まりかえっている。自分の呼吸音すら岩壁が拾って反響する。声を出したら——何倍にも増幅されて、自分の耳に返ってくる。

ヴァルドの指が脇腹を滑り、腰骨を辿った。汗ばんだ肌の上を、熱い指先がゆっくりと這う。腹筋がびくりと引き攣った。

「何……して……」

「匂いの出所を特定している」

嘘だ。分かる。これは調査なんかじゃない。だが——指が腹の上を這うたびに、カントの奥がきゅ、と疼いて、思考がまとまらない。

ヴァルドの指がリオの鎖骨に戻り、汗を掬い取った。

舐めた。

リオの汗のついた指先を、ヴァルドが舌で拭うように舐めた。ぞわ、と背筋を電流が駆け抜ける。

(……何だ、今の)

身体の奥が熱い。股の間に、じわりと湿り気が広がる。カントが——抑制剤で黙らせているはずのカントが、反応している。

ヴァルドの手が腰の下に降りかけた——

ガラガラッ、と坑道の奥から崩落音がした。小規模な余震。天井から砂利が降る。

二人は弾かれたように離れた。

「……行くぞ。ここは危険だ」

ヴァルドが先に立って歩き出す。リオは壁に背をつけて、荒い呼吸を整えた。足の間が、濡れている。

(——なんだ、今のは)

何も起きていない。匂いを確認されただけだ。βじゃないことがバレかけたが、深追いはされなかった。忘れろ——  
——忘れられるわけがなかった。

その夜。宿舎の硬い寝台に横たわって、リオはヴァルドの指の温度を思い出していた。鎖骨を辿った熱。汗を舐め取った舌。

股の間が、まだ湿っている。

「……くそ」

寝返りを打って、枕に顔を埋めた。



それからヴァルドの態度が変わった。

巡回ではなく、明確にリオを呼び出すようになった。

「鉋脈の品質検査に立ち会え」——名目はそれだ。

検査のたびに、ヴァルドはリオの身体に触れた。手首を掴んで脈を測るように嗅ぐ。肩を掴んで岩壁に押しつけ、うなじに顔を埋める。

リオは抵抗した。毎回、抵抗した。

——弱かった。

「やめろ。これ以上は——」

「お前の身体は止めてほしいと言っていない」

三回目の「検査」。坑道の分岐点、人目のない横穴。ヴァルドがリオの作業着の前を開いて胸元に顔を埋めた。

リオの手が、無意識にヴァルドの角に触れた。

ヴァルドが低く唸った。唸りが岩壁を振動させた。

「……これは何の検査だ」

「匂いの出所を特定している」

「嘘つけ」

声が震えている。自分でも分かる。

ヴァルドの手がリオの腹を這い、ズボンの腰紐にかかった。

止めなかった。止められなかった。

（——取引だ。Ωバレの口止め。身体を差し出す代わりに秘密を守る。そういう関係だ。割り切れ）

自分にそう言い聞かせた——指がカントに触れるまでは。

「ひ……ッ♡」

短い嬌声が喉から飛び出した。坑道に反響する。岩壁が声を増幅して、何重にも重なって返ってくる。咄嗟に自分の口を両手で塞いだ。

「——聞こえたぞ」

暗闇の中で、ヴァルドの金色の瞳が光った。

指がカントの割れ目をなぞる。布越しではない。いつの間にか腰紐が解けて、ズボンが太腿まで下がっている。下着の中に直接、灼けるように熱い指が侵入していた。

「っ、は……触るなっ……♡」

足を閉じようとした。ヴァルドの膝で阻まれた。太腿をこじ開けられ、指が——発情で滲んだ入口を探り当てる。

浅く、挿された。

「お……っ♡♡」

声が坑道に響く。自分の喘ぎが四方八方から返ってきて、羞恥が掻き立てられる。

(何だ、これ……指一本でこんな……っ♡)

ヴァルドの指は太く、長く、体温が高い。カントの内壁を探るようにゆっくりと動く。粘膜を押し広げ、ぬるりと奥へ進む。

初めてカントに他人の指を受け入れていた。男として生きてきた。コンプレックスのもとであるカントを、誰にも触らせるつもりはなかった。なのに——

「お前のカントから、宝石が生まれる匂いがする」

ヴァルドの声が低く、熱い。理性的な監督官の声じゃない。  
「そんな……っ、知らな……っ♡♡ ぐ……指、動かすなっ……♡♡」

指がカントの奥を掻き上げた。腰が跳ねた。声を押し殺せなかった。

(認めるな……これは取引だ……身体だけの関係だ……♡♡)

自分にそう言い聞かせながら、ヴァルドの指で軽い絶頂を迎えた。

カントがきゅう、と指を締めつけて、膝から力が抜けた。ヴァルドの腕が支えなければ崩れ落ちていた。

「……もう、離せ」

「次はいつ来られる」

「は？」

「聞いている。次はいつ空く」

見上げた。金色の瞳は暗闘の中で獣のように光っていて、その奥に——押し殺した飢餓があった。

「……明後日の午後。C-12の奥が空く」

自分が何を言っているのか、分かっていた。分かっている、止められなかった。



——パターンが確立した。

ヴァルドがリオを呼び出す。坑道の奥で二人きりになる。ヴァルドがリオのカントを指で、舌で、「確認」する。リオは声を殺して耐え、絶頂を迎え、何事もなかったように作業に戻る。

挿入はなかった。ヴァルドがそこで止めていた。リオは「これ以上はさせない」と思っていた。ヴァルドは「まだ足りない」と思っていた。

四回目。五回目。六回目。

回を重ねるごとに、身体はヴァルドを覚えていった。指の太さ。舌の長さ。竜族特有のざらつき。灼ける体温。匂い——石炭と溶岩の下に潜む、獣の匂い。

(これは感情じゃない。身体の反応だ。 $\Omega$ の本能が $\alpha$ に反応しているだけだ)

映画監督の分析癖が、自分の感情を客体化する。まるで撮影現場で「はい、ここで主人公が堕ちます」と演出をつけるように。

——だけど、カントは嘘をつかない。

ヴァルドの指が触れる前から濡れるようになっていた。坑道でヴァルドの足音が聞こえるだけで、カントの奥がきゅん、と疼く。

「お前、今日はいつもより匂いが濃い」

六回目の「検査」。ヴァルドの舌がリオのカントの割れ目を舐め上げたとき、身体が——恥ずかしいほど素直に——腰を浮かせた。

「っ……、うるさい……♡♡ 早く、済ませろ……♡♡」

「急かすな。隅々まで確認する」

ヴァルドの長い舌がカントの奥に潜り込む。人間の舌では届かない深さまで、うねるように侵入してくる。内壁を舐め回し、蜜を吸る。

「お……っ♡♡ 奥、まで……っ♡♡ 舌、長い……ッ♡♡」

リオの手がヴァルドの角を掴んだ。押し退けようとして——力が入らない。角の根元を握った瞬間、ヴァルドの唸りが増し、舌の動きが一段と獣じみた。

（何で——何で俺は、この竜に身体を開いてるんだ——♡♡）

男なのに。カントなんて、なかったことにして生きてきたのに。この身体を直視できなくて、抑制剤で押さえつけて、三年間  $\beta$  のフリをしてきたのに。

なのにヴァルドの舌がカントの奥をかき回すたび、脳が痺れて、プライドが溶けて——気持ちいい、と思ってしまう。

(認めたくない……っ♡♡ 男なのに、カントでこんな……っ♡♡)

絶頂は、いつも早かった。ヴァルドの舌に、カントはもう完全に靡けられている。



——七回目はなかった。

抑制剤が切れた。

朝、目が覚めた瞬間に分かった。体温が高い。下着が湿っている。カントが、灼けるように疼いている。発情期の前兆だ。

(まずい……)

鉦山の補給は月に一度。次の補給まであと五日。

この状態で坑道に入るわけにはいかない。汗に含まれる精霊結晶の放出量が爆発的に増える。ヴァルドに嗅がれたら

---